

「2050年から 環境を デザインする」

都市・建築・生活
の
再構築

日本建築家協会 環境行動委員会 編

6	序 「二〇五〇年」から環境をどうデザインするか 中村勉
17	1 都市へ介入してつくりかえる
18	フアイバーシテイ 縮小をデザインする 大野秀敏
43	市民がデザインする地域社会 萩原なつ子
50	パネルデイスカッション
59	2 水から都市を組み立て直す
60	東京エコシテイ 水のネットワークを生かす 陣内秀信
88	流域から見た「ヒト・自然系」 大西文秀
99	近江八幡の自然再生 柴田いづみ
107	パネルデイスカッション
111	3 農から環境を創造する
112	エコビレッジ 農を基盤に地域をつくりかえる 糸長浩司
137	エコビレッジ鶴川の試み 中林由行
144	パネルデイスカッション
153	4 緑で風景文化をつくる
154	小さな都市としての「庭」 庭師の視点で人と緑をつなぐ 三谷徹
170	自然と共生する「地球のたまご」 緑と水と光をデザインする 永田昌民
183	パネルデイスカッション
193	5 脱ヒートアイランド都市をつくる
194	脱ヒートアイランド都市 自然・地域のよさを生かしてまちをつくる 梅干野晃
219	クールスポットとしての新宿御苑 善養寺幸子
229	パネルデイスカッション
233	6 住から環境をつくる
234	団地再生 住み手が住まいをつくる 野沢正光
259	団地再生と生活支援システム 持田昭子
267	パネルデイスカッション
272	あとがき 寺尾信子

ファイバーシティ

縮小をデザインする

大野秀敏

右肩上がりて成長を続けた二〇世紀から、人口をはじめあらゆるものが縮小する二一世紀へ。世界のあり方ががらりと変わる時代環境の中で、過去の遺産を否定し破壊を続けてきた近代建築を超えて、それを最大限に生かしながら都市をリノベーションしていくのが「ファイバーシティ」。建築家による新「東京計画」である。

二一世紀は縮小の時代

「縮小」をテーマにこれからの都市の姿の提案を行ってきました。都市の二〇世紀は拡張と成長の時代で、われわれはそれに慣れすぎている。しかし、二一世紀は成長など望めないのだ、むしろ縮小していくことを前提に、それをうまくデザインしていくことが必要なんだと考えています。

建築や土木、都市計画などといった計画対象の領域分割は、職業とか役所の分割にすぎない。都市に住む立場からすれば、それはひとつながりの空間なのです。全体が望ましい状態にならないければ

環境全体としてはよくならない。建築だけがよくなっても都市がよくならなければ、本当の満足につながらない。建築家であっても都市計画家であっても、環境全体に責任をもつべきである、というのが私の基本的な考え方です。

私の「東京計画」——ファイバーシティ

前から東京を計画したいと思っていました。一九六〇年、丹下健三氏が「東京計画1960」という建築家なら誰でも知っている都市計画を発表しましたが、当時は多くの建築家や都市計画家が競って未来都市の姿を描いていました。その後、都市全体の将来像を建築家や都市計画家が発表するということはほとんどなくなっています。七〇年代以降、それまでの都市計画が、上から大掛かりにパサッと網をかけるような、権力的で非人間的なものであったことの反省から、身の回りのスケールから発想するまちづくりの方向に行ったのですが、全体ビジョンをもたないまま、スケールダウンしてしまったように見えます。現在とは言えば、全体ビジョンを一番考えているのは、ディベロッパーではないか。たとえば森ビルは港区全域の大きな模型をつくっています。しかし、東京都庁にはそういうものはない。ただ、ディベロッパーは、基本的には事業の短期の収益性を優先するわけです。そこに、収益ベースではないところで大きな計画を考えることの意味があると思い、私たちは昨年「ファイバーシティ」という計画を発表した次第です。

郊外の再編成では、高齢社会になってみんなが働かなければならない時代の郊外像を考えました。鉄道の駅から半径八〇〇メートルの円内で歩ける範囲だけに人が住んで、あとはみな緑地にするのです。この都市戦略を「緑の指」と呼んでいます(図6)。

人口が減ってくるわけですから、そこら中に空き地ができる。人口が減れば宅地が増える期待するのですが、そうはなりません。自分の宅地が二倍になるためには、全員の隣がうまい具合に空き地になり、市松模様のようにならなければなりません。さらに、幸い隣が空き地になったときに、自分が購入資金をもっている保障ありません。空き地は出てくるけれど宅地は狭いまま、という姿が郊外の将来像です。遠郊外と呼ばれるような、枝線に乗ってまたバスに乗るといって住宅地からだんだん歯が抜けるように空き地が増える。住人が減ると鉄道やバスの運行が維持できなくなり、店も減ってくる。そうなると思わしにくくなり、地価も下がります。結果的に、社会的弱者だけが取り残される。

欧米の都市では、都心は歴史があつて便利で多様性はあるが窮屈であり、郊外は移動は車に頼らざるを得ないがゆつたりしているというふうな、都心と郊外はトレードオフの関係になっていることが多い。日本では、郊外に行っても居住空間が狭い。地方都市の新規の分譲住宅も、大都市の標準に倣っていますから、大して広くない。手を伸ばせば届きそうなところに隣の家がある状況は大して変わらない。日本では一九世紀にアングロサクソンの文化圏で成立した郊外の理想は実現しなかったと

駅間距離八〇〇メートルの鉄道で郊外を再編成する

図3 東京計画1960 (丹下健三)



図2 ボアザン計画

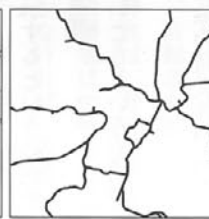
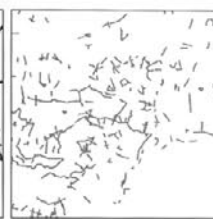
(ル・コルビュジエ、1925年)



図4 「ファイバーシティ東京」の約4メートル角の模型



図5 ファイバーシティの四つの戦略

緑の指/Green Finger
郊外の再編成緑の間仕切り/Green Partition
木造密集市街地域の防災性能
と環境改善緑の網/Green Web
都心の防災性能と環境改善都市の皺/Urban Wrinkle
新名所づくり

